

成果報告書

記入日 2011 年 8 月 2 日

氏名 二瓶マリ子	留学先国名 メキシコ	所属機関 El Colegio de México (メキシコ大学院大学)
研究テーマ：メキシコ独立運動期テハスにおけるコマンチェ族の襲撃とアングロ系フィリバスターの侵略		
留学期間：2009年8月～2011年7月		
<p>2009年8月から2年間、私は、メキシコ・シティーにあるエル・コレヒオ・デ・メヒコ (Colmex) に留学した。所属先は、歴史学研究所 (Centro de estudios históricos) である。Colmex は大学院大学であり、将来研究職に就くことを目指す大学院生と、それぞれの専門分野の第一線で活躍するメキシコ人研究者が集まる研究機関である。また、海外の研究者を積極的に受け入れているため、キャンパスには、どこかコスモポリタンで洗練された雰囲気がある。それから、メキシコの上流階級に属するエリート層の人たちが集まってくる傾向があるからであろうか、少し排他的な印象を受けたこともあった。しかし、Colmex は、メキシコで研究をすすめるのには最適の場所といえる。というのは、メキシコ国立自治大学 (UNAM) など、他の有名な国立大学には所蔵されていない二次文献 (特に英語のもの) や一次史料が多数揃っているし、wifi を利用できたり、マイクロフィルムを見ることができたりするなど、図書館の設備がしっかりしているからである。また、敷地がこじんまりとしていることも良かった。あくまでも個人的な感想だが、メキシコで研究に専念することのできる雰囲気のある研究機関を見つけることは、難しい。メキシコ・シティーという大都会は、標高が高いために酸素が薄く、交通渋滞は激しく、停電があったり、電車が時間通りに来なかったりするため (時刻表もない気がする)、物事が日本のようにスムーズには進まないことが当たり前である。そのため、例えば、目的の研究機関に到着するまでやたら時間がかかり、一苦労なのである (個人的には、その一苦労が楽しかったりするのだが)。やっと目的地に到着したときには、酸素が薄いために自分が少々疲れ気味だからか、モチベーションの高い雰囲気に囲まれないと、なかなかこちらのモチベーションが上がらないのである。Colmex に研究拠点を置き、様々な国からきている学生と一緒に研究できたことは、メキシコ史を専攻する私の場合は、正解であった。</p> <p>留学を開始して以降、博士論文で扱うテーマを 19 世紀メキシコ北部 (テハス) 史へと変更した。そのため、留学開始と同時にゼロからの研究生活が始まった。留学中は主に、①スペイン語および英語で執筆された先行研究の分析、②19 世紀初期までメキシコ領であったテハス地方 (現在の米国テキサス州) の公文書の収集、③メキシコ国立公文書館での一次史料収集、を行った。そのさい、Colmex の図書館をよく利用したのだが、</p>		

そこには日本では読むことのできないスペイン語の研究書、および米国に行かないと閲覧できない一次史料が所蔵されていたので、研究をすすめるうえで大いに役立った。

研究をゼロからスタートすることは、予想以上に難しかった。18～19世紀初期にかけてのテハスの政治、経済、入植者、およびエスニック集団関係に関する研究は膨大にある。そのため、1年目は、なるべくテーマに偏りが無いように幅広く、これらの先行研究を検討することに時間を割いた。気の遠くなるような作業を毎日地道に続けるなか、焦燥感に駆られることもおあったが、現在のメキシコ社会、そしてメキシコ＝米国間関係を理解する上で役に立つ作業でもあり、やりがいのある作業であった。使い古された言葉ではあるが、やはり、現代社会は歴史の積み重ねの上に成り立っているのだな、と思わされるが多かったのである。以下では、個人的な体験もまぜつつ、その一部を紹介したい。

例えば、メキシコは現在、極めて中央集権の進んだ国であるが、この中央集権化が歴史的に進んできたプロセスは、いわゆる「辺境地」と呼ばれるテハスに焦点を当てると、一段と浮き彫りになるので興味深い。テハスには宗主国スペインの経済を支える銀などの鉱物や天然資源がほとんどなかった。加えてメキシコ・シティーやサカテカス、グアダハラといった大都市からはとても離れていた。このような状況であるから、テハスは長年、中央のお役人たちから見放されており、テハスの人びと（テハーノス）は中央政府に反感を抱いていたと言われている。特に、メキシコが宗主国から独立した1821年以降、メキシコ政府は一時連邦制を目指すものの、中央集権を強化することで国家形成を目指した。そのため、1830年代までには住民のほとんどがアングロ系米国人入植者で占められることとなったテハスが、中央集権を進める過程にあったメキシコから独立したのも無理はない。現地で生活していると、米国に反感を抱く人たちからは、テハスを失ってしまったことを嘆く意見をよく耳にするのだが、地方と中央とが対立・交渉してきた歴史的経緯に照らし合わせてみると、「テハスを奪った傲慢な米国」ばかりにその要因があったわけではないことがわかる。

テキサスを喪失したメキシコ側の要因をさらに知りたいと思い、私はある日、文献に頼るばかりではなく自分の目で北部をみることも重要だと思い、メキシコ・シティーからバスに乗って北部を周遊してみた。特にサカテカスを超えてチワワに突入したあたりからは、シウダ・フアレス、ノガレス、ティファナ、ラ・パスと町々を移動する間に、辺鄙で貧しそうな町をいくつも通過した。そのたびに、「この人たちが生活するためには、他の大都市や米国に出稼ぎに行かざるを得ないだろう」と思ったものである。メキシコ北部は、現在もこのような状況であるから、交通手段が発達していなかった19世紀、中央から見放されていたテハスの状況はさらに深刻だったのだろうし、アングロ系入植者があつという間に増えてしまったのも、理解できる気がした。現代のメキシコ人が、「米国が待ってくればテハスは発達して、それを失う必要などなかった」と主張することは簡単であるが、私は、北部の現在の状況を目の当たりにして、そのようなメキシコ人の主張が本当に妥当なのか、正直、疑問に思わざるをえなかった。

歴史が今日のメキシコ社会の土台となっている、と感じることは、他にもある。植民地期、テハスの役人たちは、その地方に特有の状況を見逃した上からの理不尽な要求に対して、

「(王室の条例を) 聞きはするけれども従わない (obedezco pero no cumplo)」と主張することが多かったのだが、この慣習は、現代のメキシコ社会にも引き継がれているのではないだろうか。例えば、多くのメキシコ人は信号を守らないし、道端では堂々と海賊版DVDやブランド商品(ピラータという)を売っていたりする。これを受けて、「メキシコは、法律を遵守しない後進的な国だ」と主張することはたやすい。しかし、メキシコには、全ての規則を守っていたら自分の生活も家族の生活も成り立たない、または規則を守ることが可能な状況にはない、という状態が存在する。したがって、「聞きはするけれども従わない」というスタンスは、彼らが生活していく上で必要不可欠なのである。メキシコに限らず世界では、欧米的価値観に基づいて法律が執行されることがあるが、非欧米社会に住む現地の人びとが、その法律に従って生活を営むことはできない場合もたくさんある。それなのに、その法律を人びとが遵守することができないからといって、その国に「後進的」という価値を賦与してしまうことには、疑問を感じざるを得ない。もし法律が「違法」とみなす行為が日常茶飯事に人びとの間で行われているのであれば、それはなぜなのか?この疑問に答えるためには、その地域の人びとの立場に自分も立ち、そこに根差した社会構造を歴史的にたどることが有効だとおもうのである。その糸口となる視座を、現在私が扱っているテーマは提供してくれるわけだが、これは、メキシコに留学したおかげで、深く考察することができた結果なので、本当にメキシコに留学できて良かったと思っている。

私にこのような貴重な機会を与えてくださった貴財団には、心から感謝申し上げます。これからも、18~19世紀メキシコの歴史に関する研究を進め、メキシコの魅力を沢山の人びとに伝えることで、貴財団にも、メキシコでお世話になった沢山の方々にも、恩返しをしていきたいと思っております。

最後になるが、貴財団からの支援により現地で収集した一次史料をもとに、これまで以下の研究成果を発表した。

<刊行済み査読付き論文>

1. 「メキシコ独立運動再考——カサスの反乱を事例に」『イベロアメリカ研究』第33巻第1号(2011年度前期)、37-49頁。

<口頭発表>

1. 「メキシコ独立運動再考——1811~1813年のテハスを事例に」日本ラテンアメリカ学会東日本部会、2011年1月8日、於東京大学。
2. 「スペイン領期テキサスでのメキシコ独立運動と米国(1810~1813年)」日本アメリカ史学会第8回年次大会、2011年9月18日、於北九州市立大学。

今後も、引き続き、植民地時代末期テハスにおいて、スペインと米国と間で境界線をめぐる対立が生じた歴史的過程をつぶさに検討し、論文を執筆したいと考えている。